長野大学紀要 第13巻第4号 303-308頁 1992

グレアム・グリーンの『拳銃売ります』について

On Graham Greene's *A Gun for Sale*

岩 崎 正 也
Masaya Iwasaki

1

グリーンは、エッセイ「失われた幼年時代」('The Lost Childhood', 1947) の結末に、その表題の出典であるエイ・イー (A.E., 1867-1935) の詩「種播き時」('Germinals') の第6節を引用した。

In ancient shadows and twilights
  Where childhood had strayed,
The world's great sorrows were born
  And its heroes were made.
In the lost boyhood of Judas
  Christ was betrayed.[1]

グリーンが生涯をとおして取り憑かれた「失われた幼年」のオブセッションは、1935年のリベリア旅行の体験を経て、多くの作中人物のなかに再現され、とくに、「地下室」('The Basement Room', 1935) と『拳銃売ります』(*A Gun for Sale*, 1936) では、裏切りと結びつく重要なテーマとして示される。

「地下室」は、グリーンがリベリア旅行から帰る途中で、「航海の倦怠感から逃れるために貨物船上で構想を得て[2]」制作された短篇である。物語を貫く、大人の堕落と暴力とが子どものイノセンスを破壊するというテーマは、グリーンがリベリア体験から得た、ヨーロッパ「文明」の退廃がアフリカの「原始」の秩序を脅かしているという認識から生れている。冒頭の章で、執事のベインズがシエラ・レオネの沿岸植民地で事業を営んでいたコースターであることが読者に提示されているからである。

彼はなにかをなくして残念がっているように、ジンジャー・ビールを一杯ぐっと飲んだ[3]。

ベインズは、毎朝11時半にジンジャー・ビールを一杯飲んでからチョップを食べるという、沿岸地域で暮らしていたときの習慣をいまも信奉し、7歳のフィリップに向かい、40人もの黒人を雇っていたころの暮らし向きのよさを、黒人の「文明」度の低さをもとにしたお伽噺にして聞かせるのである。

1935年、それまで一度もヨーロッパの外へ出たことがなかったグリーンは、23歳のいとこのバーバラを伴い、約4カ月にわたるリベリア行きを決意する。二人は1月4日朝6時5分発の列車で、ロンドンのユーストン駅からリヴァプールに向かい、4カ月後の4月のある寒い朝にドーヴァーに帰港する。その翌年、出版されたグリーンの自伝的な旅行記である『地図のない旅』(*Journey Without Maps*, 1936) は、空間的移動に時間的遡行を重ね合わせることにより、人類の原始と個人の幼年時代を探求するという二重のテーマと構造をもち、この二重性が隠喩として「地下室」のベインズとフィリップ少年の関係に持ちこまれる。グウェン・G. ボードマンは、この旅行記と「地下室」の関係について、「もし『地図のない旅』のなかに『地下室』にあるアフリカ的な隠喩を解く鍵が与えられていなければ、その隠喩の重要性は明らかにならないだろう[4]」と述べているが、アフリカにたいするグリーンのイメージがレイヴンの舞台であるノッティンガムのイメージに劣らないことを考えると、ボードマンのヒントは『拳銃売ります』にも当てはまるだろう。

『拳銃売ります』のレイヴンはアンに出会うこ

とによって、「追われる」から「追う」存在へ転化する。その二種の領域を隔てる「国境」は、ノトウィッチの霧に閉ざされた貨車置場の小屋の中である。警察に囲まれた小屋のなかで一晩をアンと一緒に過すことによって、レイヴンは冷酷さと憎悪を棄て、他者への信頼を取り戻すことができたからである。しかも、早朝の霧を利用して警察の包囲網をぬけだし、巨悪の根源であるマーカス卿を滅ぼすことに成功する。しかし、同時に、アンの裏切りによって、恋人であるメイザー警部の部下に射殺される。

グリーンはこの物語を貫くテーマ――イノセンスと裏切り――を他の作者による作品のモチーフから引用している。一つは、A．E．の詩「種播き時」第6節に見られるユダによるキリストの裏切りである。二つ目はアンデルセン童話の「雪の女王」('The Snow Queen') に登場するカイの心のなかに棲みついた、悪の象徴である氷のかけらを融かすゲルダのイノセンスである。さらに「雪の女王」のイノセンスのモチーフが、新約聖書のマタイ伝第18章3節に記されているおさな子のイノセンスの記事に基づいていることは注目すべき点である。ゲルダがカイを連れて再び自分の家のドアを通過すると、二人は自分が大人であることを意識する。家のなかでは昔のとおりに、祖母が聖書を声を出して読んでいる。「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻りて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ[5]」。これを聞いた二人は突然、まえにくり返し歌っていた賛美歌の意味を理解するのだ。"Roses bloom and roses decay. / But we the Crist-child shall see one day[6]." このようにして、幼年のイノセンスが、マタイ伝第18章3節から「雪の女王」のゲルダを経て、『拳銃売ります』のアンとして小説化されたと考えられる以上、アンの仲介によってレイヴンが「国境」を通って踏みこんだ領域は現実の日常を越えた霊的な世界であるということができるといってよい。したがって、両者の出会いの場面を取りあげることにより、レイヴンの変容を検証できるのではないか。

2

この物語には、キリスト降誕のモチーフと「雪の女王」のイノセンスのモチーフとが交互に引用される。まず、降誕のモチーフは第1章3節でレイヴンの意識をとおして再現される。暗殺の謝礼として偽札とは知らずに、代理人チャムリーから200ポンドを受けとり、上機嫌でアパートの家主が経営するカフェに辿り着く。玄関先で小さなモミの木の鉢に、彩色されたガラスでできた秣桶がぶら下がっているのを見て、レイヴンはこの光景に憤慨して、「旅舎にをる處なかりし故なり[7]」と言って、自分の教養を自慢する。

一方、「雪の女王」のモチーフは第1章2節で、レイヴンがアンに初めて出会う場面に再生される。ロンドンの郊外行きのバスを降りたアンは、アパートへ向かって通りを上がっていく途中で、すれ違った男の兎唇を意識する。レイヴンの意識に残ったのはアンの姿ではなく、アンが4階の部屋でかけたレコードから聞こえてくるメロディである。

あなたには
ただのキュウだけど
この私には
パラダイス。
あなたには
ただの青いペチュニアだけど
私には
それがみんなあなたの瞳[8]

メロディを聞いているレイヴンが、「『雪の女王』のカイのように、自身のなかに冷たさをもっていた[9]」のは、悪魔の鏡のかけらが体に入り、心臓が氷の塊になって痛みを感じなくなったカイのように、「胸のなかにある氷のかけらになんの痛みも感じなくなった[10]」からである。

この場面は「雪の女王」のモチーフを媒介として、レイヴンの死を暗示する。その心象風景は、第2章3節の建売住宅の台所の場面に引き継がれて、フロイトの隠蔽記憶の法則にしたがって、レイヴンの意識の上に甦る。「心のなかの鋭い冷たいものが激しい痛みを伴って崩れていた[11]」ために、レイヴンは声をあげて泣きだす。

このようにして、レイヴンがもつ「氷のかけら」は冷酷さ、他者への不関与からくる孤独、復讐心を表すといえるだろう。これ以後、レイヴンの冷酷さは、アンに出会うたびに、侵食されていくが、

そのワン・ショットは、アンがノトウィッチ駅のホームに降りたときの、レイヴンに連れこまれたビュッフェの場面に見られる。

レイヴンは、ちょっと目を離したすきに、アンから顔に熱いコーヒーを浴びせかけられて、呻いたときに初めて、痛みが国防大臣、その女性秘書や自分の父親が感じた苦痛であることを知る。この点で、レイヴンの肉体的な苦痛は彼の暴力的な精神が人間の良心によって崩壊し始めたことを象徴する。

降誕のモチーフと「雪の女王」のモチーフの両者が重なり合って引用されるのが、ウィーヴィル河畔の車庫の場面である。

> 河岸に並ぶ大きな家並の一軒では車庫の入口のドアが少し開いたままになっていた。そこは明らかに車を入れる場所ではなく、ただ乳母車や、子どもの遊び場、それに二、三の汚れた人形や煉瓦を置く所だった。レイヴンはそこに避難した。彼は体の中まで冷たかった。しかしこれまでずっと凍りついていた一カ所だけは別で、その氷の短刀は強い痛みを感じて融けだしていた[12]。

車庫にくる直前まで、「もし逃げようと思うなら、いまはこれまで以上にもとの自分でいなければならない[13]」と決意したばかりなのに、なぜレイヴンの冷酷さが和らいだのか。レイヴンの融解作用には、前提としてアンによるイノセンスの働きかけが不可欠であるにもかかわらず、ここでは、建売住宅の場面とは異なり、他者の苦痛に耐えきれずに抱く恐怖感としての融解作用が、なんの予告もなく生じたように見える。しかし、車庫の場面の意味はつぎの場面によって解明される。

> 彼は一瞬、雨と暗闇のなかのウィーヴィル河のそばの車庫にいたときの恐ろしい孤独感を想いだしていた。なにか貴重なものを失ったというような、取り返しのつかない間違いをしたという感情だった[14]。

翌日、教会の慈善市に行く途中、レイヴンは、クリスマスの商店街を歩いているとき、棚に石膏でできた聖母子像や、東方の博士たちと羊飼いの像などを見ると、反射的にルカ伝第2章7節の聖句を想いだして、降誕劇を迷信として嘲笑する。彼は信仰をもっていないけれども、保護院で受けた宗教教育のおかげで多くの聖句や、慈善、忍耐などの美徳の存在を知っているのだ。レイヴンはこのあと、警官とすれ違ったときに、アンから示された信頼を初めて肯定し、前日の車庫のなかで抱いた感情がアンを失ったことにたいする恐怖感であることに気づく。そして信じていなかった傍らのキリスト像に向かい、「もしおまえが神なら、おれがあの女に危害を加えるつもりのないことを知っているだろう。なんとかしてくれよ。振り返ったら、女と舗道の上で会うようにしてくれ[15]」と祈ったことは、アンを失ったことにより、他人の苦痛にたいする恐怖感を取り戻したことを示している。

このように前日の車庫の場面を回想するレイヴンの意識をとおして、読者は、車庫のなかでレイヴンが融解作用を起すまえに、アンの存在を激しく願ったことを知らされ、回想するレイヴンの陰には注解を加えるグリーンが存在することに気づかされる。

またクリスマス・ツリーに吊された俗化した「秣桶」のイメージは、車庫のなかの乳母車として再現され、読者の意識の上にルカ伝第2章7節を唱えるレイヴンとキリストのイメージが重なる。

3

「追われる」レイヴンが「追う」存在に転化する「国境」の場面は、深い霧に閉ざされた貨車置場の隅にある小屋の中である。闇のなかで一夜をともに過したアンが裏切りを決意したという点で、これはレイヴンの運命が死に決定づけられたことを読者に意識させる注目すべきショットである。暗闇のなかでレイヴンは、アンから、国防大臣が貧民層の出身であり、貧しい人々のために尽力したこと、父は泥棒で、母は投身自殺をしたことを聞かされて、自分と同じ階級の人間を裏切っていたことを知って動揺する。教会の慈善市でアンのハンドバッグをもつ老婦人を見て、「同じ階級の人間同士が互いに餌食にし合うなんて、これは悪だ[16]」と憤るレイヴンは、同じ階級の人間を裏切る

ことは不正義であり、悪だと考える。しかも、お偉方で、教会のいい席に座る人たちの一人と思っていた国防大臣の死にたいしては、それまでなんの苦痛も感じなかったからである。レイヴンの内部でしだいに罪の意識が増殖する。冷えきった小屋のなかで眠りについたとき、レイヴンは、大臣が彼に話しかける夢を見る。

「射ったらどうだ。私の目を」。レイヴンは両手にパチンコをもつ子どもで、泣いたままで、射てなかった。すると老大臣は言った、「さあ、射っていいよ。一緒にうちに帰ろう。射ったらどうだ[17]」

ボードマンは妖精物語の恐怖と懲罰は、文明社会の恐怖と懲罰を悪夢の中で再現したものだという。夢から覚めたレイヴンは、しだいに自分が暗殺した大臣とその女性秘書の苦痛に耐えられなくなって、アンに大臣殺害が自分の行為であると言う。そのときアンは突然、「これまでとくに醜悪と思わなかったレイヴンの唇が、心に浮かび、思っただけで吐きそうに[18]」なり、裏切りを決意する。すでにまったく憐れみを感じなくなったアンにとって、レイヴンは、「注意深く取り扱ったあとで殺さなければならないたんなる野獣[19]」にすぎない。ひとたびアンのイノセンスにより、他者への苦痛、恐怖感を取り戻したレイヴンの冷酷さは、カイの氷がゲルダの涙によって融かされたように、消滅に向かい、ふたたびもとの存在に帰ることはありえない。ゲルダをのせて橇を曳くトナカイがフィンランド人の女に向かい、ゲルダに大きな力を与えて欲しいと頼んだとき、女はゲルダ自身のなかに最も強い力があると答える。

. . . it consists in this, that she is a dear *innocent* child[20]. (イタリックは筆者による)

暗殺の本当の依頼者であるマーカス卿を射殺したあと、メイザー警部と部下に囲まれたレイヴンは、アンが歌う「それはいい人が、グリーンランドからもってきた雪の花だというけれど[21]」を想いだして相手を射つことを断念し、その部下に射たれたときに、「死が耐えられない苦痛を伴って訪れる[22]」のを意識する。こうして「ゲルダが優しいイノセントな子どもである」という「雪の女王」のモチーフが完成し、「ユダの失われた幼年時代に、／キリストは裏切られた」という裏切りのモチーフが成立する。

4

『拳銃売ります』は悪を滅ぼすイノセンスを目に見える現実世界のスリラーとして表現した妖精物語である。語り手の視点は、『スタンブール特急』(*Stamboul Train,* 1932) の場合につづき、複数の登場人物の意識の上を、カメラ・アイのように移動し、物語は東欧のある国から、ロンドン、ノトウィッチを経て、ふたたびロンドンへと引き継がれる。

第1章1節は、国防大臣暗殺の行動がレイヴン自身の視点から冷静に記される。彼の意識は、カメラのレンズのように精確に大臣の部屋の中を記憶する。机から、安楽椅子、壁のうえの地図というように。生れながらにして兎唇をもつレイヴンは、幼いころから周囲の人々に裏切られ、疎外されたために、他者にたいして憎悪の感情しか抱くことができない。「憐れみは、苦痛を『みること』に耐え得ない感性の病気なのである[23]」といったのは、ヴィクトル・ド・パンジュだが、レイヴンは、他者の苦痛を見ても憐れみを感じるどころか、恐怖さえも感じられないのだ。28歳のレイヴンは、「恐怖に慣れていて、恐怖が20年間も彼の内部に生き続けていた[24]」からである。彼を裏切った世間の人たちにたいする復讐と憎悪が彼の「生」であった。窃盗容疑のためメイザーから追われたときに、「激しい憎悪の気持ちがなかったら、自首していただろう[25]」と彼は感じる。他者への憐れみをすこしももたなかったため、レイヴンの復讐行為としての暗殺はただの機械的な仕事にすぎない。

殺人はレイヴンにとってたいしたことではなかった。ただ初めての仕事というだけだった。用心しなければいけないし、頭を使わなくてはいけない[26]。

レイヴンの不幸な生い立ちはつぎのようにまとめることがでる。

(1) 生まれつき兎唇のレイヴンは、子どもの頃の手術の失敗のために、上唇に傷痕がある。現在、28歳くらい。
(2) レイヴンは父が刑務所にいるときに生れる。6年後父は絞首刑に処せられる。それを知って、母は台所で包丁でのどを切って自殺する。
(3) その後、保護施設へ送られ、宗教教育を受ける。

人間の憐れみのレベルを感性の軸のうえに並べてみると、レイヴンの冷淡さと対極にあるのが、『恐怖省』(*The Ministry of Fear,* 1943) のアーサー・ロウである。アーサーは幼い頃から憐れみという「感性の病気」に憑かれ、母親から、母のかわいい坊やは虫けら一匹だって殺せないと思われている。ところが、ある日、原っぱでイヌに痛めつけられているネズミを見て、突然、ネズミをバットで打ち殺す。グリーンはこのときのアーサーの感性のあり方をつぎのように記す。

> 人が苦しんでいるのを感じると、不安定な心の平静さがくずれてしまう。すると彼は人のためにどんなことでもしようとする。なんでも[27]。

ネズミの苦痛に耐えられず、ネズミを打ち殺したときのアーサーの過剰な憐れみは、神の苦痛に耐えられず、自殺を図ったスコウビーの感性とパラレルの関係にある。この点で、スコウビーはアーサーの成人した姿であるといえる。

グリーンの『燃えつきた人間』(*A Burnt-Out Case,* 1962) では、『おとなしいアメリカ人』(*The Quiet American,* 1955) のファウラーのもつ政治への不関与の態度を通過して、「生」の生き止まりに達したケリーが登場する。ケリーは他者の苦痛にたいし憐れみをまったく感じないという点で、やはりスコウビーと対照的である。ケリーとレイヴンの違いは、ケリーがスコウビーの憐れみを突き抜けて、感性の枯渇状態に達しているのにたいして、レイヴンは他者への憐れみを感じるための前提となる他者の苦痛から生じる恐怖さえも抱かないという、感性の未分化の段階にある点だといえるだろう。

5

グリーンは、ノッティンガムに住んでいた頃に下宿の陰鬱さと、勤めていた『ノッティンガム・ジャーナル』紙の仕事にたいする挫折感とを、『地図のない旅の』のなかで、「ノッティンガムのことをよく知っている人なら、アフリカのどんな暗黒な面についても確信をもって語ることはできないだろう[28]」と記し、その例として、「マットのうえで病むイヌ、お茶のときのカン詰めのサケと、夕食のときに編集部室へ外から買ってくる熱いポテトチップ[29]」をあげている。

30年代のイギリスは、大恐慌の影響により、経済力の停滞が進むとともに、文化的には、大戦まえの父親の権威とイギリスの伝統がもつ「成熟」、「責任感」、「大人」が崩壊した混乱の時期である。したがって、30年代を、リチャード・ハネイの英雄的な冒険を描いたジョン・バカンの時代ではないと判断したグリーンは、2作目のスリラー小説の主人公レイヴンを残酷で暴力的な性格に造りあげたのである。

(いわさき まさや　教授)

(1992. 1. 16受理)

註

1 Graham Greene, *The Lost Childhood and Other Essays* (1951; rpt. London: Eyre & Spottiswoode, 1954), p. 17.
2 Graham Greene, *The Third Man and the Fallen Idol* (1950; rpt. London: Heinemann, 1950), p. 151.
3 *Ibid.*, p. 155.
4 Gwenn R. Boardman, *Graham Greene* (Gainesville: University of Florida Press, 1971), p. 34.
5 Hans Christian Andersen, *The Complete Illustrated Stories of Hans Christian Andersen,* trans. H.W. Dulcken (1982; rpt. London: Chancellor Press, 1990), p. 340.
6 *Ibid.*, p. 340.
7 Graham Greene, *A Gun for Sale* (1936; rpt. London: Bodley Head, 1973), p. 13.
8 *Ibid.*, p. 9. 加島祥造訳『拳銃売ります』(グレアム・グリーン全集　5，早川書房，1980)，p. 10.

9 *Ibid.* , p. 9.
10 Hans Christian Andersen, *The Complete Illustrated Stories of Hans Christian Andersen,* p. 319.
11 Graham Greene, *A Gun for Sale,* p. 52.
12 *Ibid.* , p. 77.
13 *Ibid.* , p. 77.
14 *Ibid.* , p. 106.
15 *Ibid.* , p. 107.
16 *Ibid.* , p. 108.
17 *Ibid.* , p. 149.
18 *Ibid.* , p. 157.
19 *Ibid.* , p. 159.
20 Hans Christian Andersen, *The Complete Illustrated Stories of Hans Christian Andersen,* p. 336.
21 Graham Greene, *A Gun for Sale,* p. 206.
22 *Ibid.* , p. 208.
23 ヴィクトル・ド・パンジュ著、窪田啓作・窪田般弥訳『グレアム・グリーン』(河出書房、1956), p. 100.
24 Graham Greene, *A Gun for Sale,* p. 49.
25 *Ibid.* , p. 105.
26 *Ibid.* , p. 1.
27 Graham Greene, *The Ministry of Fear* (1943; rpt. London: Bodley Head, 1973). p. 17.
28 Graham Greene, *Journey Without Maps,* (1936; rpt. London: Bodley Head, 1978). p. 109.
29 *Ibid.* , p. 109.